令和４年度　日本大学スポーツ科学部　個人研究費　研究実績報告書

所属： スポーツ科学部　競技スポーツ学科
資格： 専任講師
氏名： 田中　光輝

研究課題名	相撲競技の指導のあり方ついて
研究目的及び研究概要	新型コロナウイルスは、私たちの生活に未曽有の事態をもたらした。スポーツ活動も例外ではなく、さまざまなスポーツイベント、競技大会が延期、中止を余儀なくされ、日常の運動・スポーツ活動へも大きな影響を及ぼした。相撲競技の指導においても、コロナウイルスにより、わたしたちの身体活動・運動の実施状況が様々な部分で思案することになった。そこで、スポーツに関わるニーズがどのように変化しているのかを調査し、安全に相撲競技指導を含め、活動がスムーズに行われ、相撲競技のガイドラインを考えながら、新しい時代の運動指導・スポーツ活動の在り方などを解明する。
研究実績の概要 研究の進捗状況・得られた成果・今後の課題・研究実績等	社会が急激に変化する中、相撲競技者人口は年々減少している。理由として考えられることは、少子化・他種目への移行等スポーツや趣味の多様化で選択肢が多くなった事などある中、指導に関しても難しい状況にある。本研究はこのような状況の中で、特に問題となっている相撲人口底辺拡大、少年指導の工夫など考え、「わんぱく相撲」大会・各地域の大会、実際活動しているクラブなどを中心に、視察をして相撲指導の実態等について代表者のアンケートと対話で、様々な情報を収集して、相撲競技の活動のありさまを知り考察する。（第37回わんぱく相撲　10/29（土）10/30（日）から） 47都道府県代表のチーム代表者に事情を聞くことは無理で、2日で函館、福島、新潟、愛知、千葉、埼玉、東京の7チームの代表者と情報交換を行った。過去にわんぱく相撲を手伝った経験が活かされ、様々な事を聞くことができた。内容は下記3つの部分についてまとめている。 ①相撲の指導で感じることについて まず競技人口に関しては、どの競技も減少傾向であり、相撲競技も年々減少している。これは、スポーツ庁の委託事業から、「日本の将来推計人口（平成29年推計）結果」を基に、野村総合研究所が作成した人口推計結果から、今後30年間（2048年度まで）の部活動人口を推計すると、ピーク時の2009年から2048年には約30％が減少。チームスポーツでは半減以上となる競技も存在すると報告されている調査から理解できる。この状況を防ぐものとして、わんぱく相撲大会（公益財団法人日本相撲連盟、公益社団法人東京青年会議所主催）は、出場選手数約4万人、最大101チーム、北は北海道から南は沖縄と規模の大きい大会として、相撲人口の悪化を防ぐ一つの手段として期待されている。指導者は40代から60歳代が多く、地域密着型の相撲クラブチームとして活動している。20年前と比べると子どもの体力は落ちているが、技術に関しては向上していると感じている。また、「相撲競技は体で覚える部分が多く」言葉で教えるのに苦労しているようである。地域密着型クラブであり、家庭環境のことや限らてた環境での練習方法に難しさを述べていた。 ②新型コロナウイルス及び安全面に関して 学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル可能な限り感染及びその拡大のリスクを低減させながら、なるべく個人での活動とし、少人数で実施するようにして、十分な距離を空けて活動。密集する運動・近距離で組み合ったり接触したりする場面が多く、向かい合って発声したりする活動は行わないようにしている。 緊急事態宣言の対象区域に属する地域においては、その感染状況を踏まえ、他校との練習試合や合宿等を一時的に制限するなど感染症への警戒度を高めて警戒した。また、部活動終了後に、生徒同士で食事をすることを控えるよう指導を徹底している。 ③今後の活動について 上記内容を含めこれからも予想できない問題に直面することが考えられ、子どもたちがスポーツを続けられる環境を保ち続けていくには、各関係機関や学校等において、それぞれの運動活動の在り方に関して、安全面を第一に考えて、行動していく必要がある。そのために正しい情報収集をしっかりして、行動するべきという意見がほとんどであった。今後も「指導のあり方と安全」について、現地調査や試合の方法等など調べて、正しい指導法を考えたい。